

第1章 ラジオスタジオ空間におけるカテゴリー化

空間班

0. はじめに

ラジオスタジオにおいては様々な人が存在し、それぞれに様々な役割が与えられている。例えばその空間にはアナウンサーやコメンテーター、ゲストやディレクターやアシスタントの人などが存在している。そして、それぞれの役割としては、アナウンサーは職業としてラジオ番組に出演し、かつラジオ番組において、その番組をスムーズに進行させるというような課題が与えられている。ただ、エスノメソドロロジー研究者である西阪は「異文化性の社会的構成」という論文〔西阪仰, 1993: 224〕において次のように述べている。

これらの研究は⁽¹⁾、異文化間コミュニケーションの研究として、非常にすぐれたものであることは確かとしても、しかし、「異文化間」ということは、あくまでも議論の前提となっている。以下では、このまさに「文化が異なっている」という事実を、単に説明のための根拠として用いるのではなく、むしろそれ自体を、探求すべき一つの社会現象とみていこうと思う。

つまり、西阪は何か異なっているという事実を議論の前提とするのではなく、むしろ異なっていること自体を、探求すべき社会現象と見ているのである。このことをラジオスタジオ研究に当てはめるならば、スタジオ内参加者の役割の違いを研究の前提とするのではなく、それ自身を探求の対象とすることができるということになる。すなわち、アナウンサーがアナウンサーとして自明な存在であるということから議論を始めないということである。エスノメソドロロジーの立場から言うと、ラジオ番組におけるアナウンサーがアナウンサーとして自明な存在であるとは限らない。ラジオスタジオ空間における参加者は、一人の男/女や、サラリーマンや、社会人や、一市民やプロ/しろうと、といったさまざまなカテゴリーを当てはめることができる可能性を持っている。しかし、それにもかかわらず、どのようにしたらラジオスタジオという場面において、その人にアナウンサーというカテゴリーを当てはめることが有意義でありえることとなるだろうか。そういったことを私たちは研究したいのである。

これについては、エスノメソドロロジー的な立場に立ったカテゴリー論が、私たちの分析を導いてくれる。カテゴリー論について、サックスは「会話データの利用法」〔Sacks, 1972=1988〕の論文 — これは自殺志願者あるいはその代理人と、緊急精神治療室の職員との間で行われていた電話でのやりとりを、書き取ったものにもとづいた分析であるが — の〔1・0〕と〔1・0・1〕のところにおいて次のように述べている。

さて、今まで集めてきたデータに対して記述を施すためには、様々な基本的な道具立てが在る。成員カテゴリーの集合もそのような道具立ての一つである。本稿の目標は、一つの記述を構成していくことであるが、その記述は、以下のような結論 — すなわ

ち、「私には頼れる人が誰もいない」というような結論——が自殺志願者たちにより繰り返し（さまざまな場面においても色々な人々によっても）到達可能であるということ、けっして損なうことがあってはならない。…（後略）〔1・0〕

（前略）…つまり、本論文は、成員自身がどのような方法に従って成員をカテゴリー化しているか、あるいはそのようなカテゴリー化活動がどのようなことと関連するものであるか、ということについての研究でもなければならないのである。

〔1・0・1〕

わたしたちもサックスにならって、ラジオスタジオの分析から集められてきたデータに対する記述を行うためにカテゴリー化という概念を導入する。すなわち、ラジオスタジオの参加者にカテゴリーをあてはめるだけで終わっていたのではない。ラジオスタジオ空間における参加者のカテゴリー化のようすを研究することによって、ラジオスタジオという空間の記述にまで分析をまとめあげることができるはずである。

日本におけるカテゴリー論に関する先行研究としては、身体障害者の購買場面を記述した、山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正の論文（1993）や、山崎らの論文のデータと同じものを用いながら、山崎らとは別な視点を提案している岡田光弘の論文（1995）⁽²⁾、そして異文化性についての西阪仰の論文（1993）などがある。これらの論文を参考にして、ラジオスタジオにおける参加者のカテゴリー化のようすについて論じてみようと思う。まずはじめに、この調査のいきさつを述べ（第1節）、次にラジオスタジオにおいて有意味だと思われるカテゴリー対について検討する（第2節）。そこからアナウンサーがどのような存在として場面の中で振る舞っているかを明らかにする（第3節）。最後に、リスナーとアナウンサーとの関係に言及しながら、ラジオスタジオ空間がどのように編成しているかをまとめる（第4節）。

1. 調査経緯

この研究は、エスノメソドロジーにおけるビデオ分析の手法を用いて、アナウンサーがラジオスタジオ内で番組を行う相互行為を分析したものである。

調査は徳島県で毎週日曜日の午前中に放送されているワイド番組を1997年と1998年の2回にわたって、その番組が収録されているスタジオをビデオカメラで撮影することによって行われた。この番組は、3人のアナウンサーと1人のコメンテーター、および何人かのゲストによって構成されているワイド番組である。1997年7月6日は、2台のビデオカメラを用いて、1998年1月11日は、4台のビデオカメラを用いて撮影した。1997年7月6日と1998年1月11日との違いは、1997年7月6日におけるアナウンサーのうちの一人が、1998年1月11日においては別のアナウンサーと代わっている点である。

撮影に関しては、事前に放送局のその番組の責任者に調査依頼状を出し、その許可を得た。上記のようにして撮影したデータから分析可能な場面を選び出し、音声トランスクリプトと、必要に応じて視線やうなずきを含めた画像トランスクリプトを作成した。この論

文の分析は、こうして作成したトランスクリプトにもとづいている。

私たち社会調査実習のメンバー11人（教員の檜田も含む）は空間班、人間班、インタビュー班、FMやまのは（仮名）班の4つに分かれて分析を行い、各班それぞれで1つの論文を書いた。

2. ラジオ・スタジオ空間におけるカテゴリー化

ラジオ・スタジオ空間においては、どのようにして、そしてどのようなカテゴリーが有意義になっているのだろうか。次のトランスクリプトを見ていただきたい。

〈断片1〉 データZ（10：29' 55" ～ 10：30' 20"）⁽³⁾

↓①

I：あの文部省が：：生涯学習の一環として：：取り入れているんですね。//

T： // そう

↓③

I： ま、老人の//健康対策っていうかたち：です

T：ですね。（0.4） あの（4.0） //はい

↑②

↓④

I：か。＝

T：＝そうですね、あの（.）ダンスの組織である、日本ボールルームダンス連盟と

↓⑤

I：＝はい

T：いう組織が文部省に認可されまして＝ 老人（.）の（0.4）余暇としての（.）

↓⑥

I：＝ん：：：

↓⑦

＝はい

T：ダンス＝ あるいは学校教育としてのダンスですね＝

この場面は、文部省が社交ダンス⁽⁴⁾を奨励していることに関する話題について、IとゲストのTとの間で交わされたやりとりである。まず〈断片1〉の↓⑤⑥⑦を見ていただきたい。他の場面においてもだが、ここで示しているようにIはTが話している最中にたびたびあいづちを打っている。「あいづちを打つ」という行為は相手から情報を引き出す上で、有意義な行為として見ることができる。なぜならば、相手の話に対して、あいづちを打つことは、相手の話を理解しているという表示だからである。ニュースインタビューにおいては、「情報提供者」と（情報の）「受け手」という役割が制度的に確立されていると山田富秋は言っている〔山田, 1996: 128〕。このことは〈断片1〉のようなワイ

ド番組における会話にも当てはまるように思われる。つまり、Tは「情報提供者」であり、Iは（情報の）「受け手」であるということが言えるだろう。

ここで、2組4つの概念を導入する。それは、「話し手」／「聞き手」および「情報提供者」／（情報の）「受け手」の4つである。この概念の原則とは、「話し手」が「情報提供者」であり、「聞き手」が（情報の）「受け手」であることだ。上記においては原則どおり「情報提供者」／（情報の）「受け手」、「話し手」／「聞き手」の組み合わせの形、すなわち、「情報提供者」が「話し手」でもあるような形が採用されている。しかし、〈断片1〉の冒頭部分において、4つの概念の原則に反する場面を見ることができる。この場面では、Iは（情報の）「受け手」でありつつも「話し手」であるように見える。なぜなら、Iは自ら話した話題についての真偽の確認を、Tに求めているからである。このことはIの発話の語尾によって明らかであり、「～ですよね」（〈断片1〉の↓①）がその部分にあたる。なぜこのようなことが起きたのだろうか。この問いに関して、以下で答えていこう。

既に述べた4つの概念の原則に反する場面の中では、あるカテゴリーの組み合わせの逆転が起きているように思われる。すなわち、「話し手」と「聞き手」の組み合わせる相手が、通常と逆になっているようなのである。このように、「話し手」と「聞き手」の逆転が可能になるのは、発話の語尾に「～ですよね」という疑問文の形にして文全体の意味を変えるような言語構造を、私たちが持っているからである。それゆえ、私たちは必要に応じて「話し手」であり、なおかつ（情報の）「受け手」であるような、提供者に対するコミュニケーションの手法を採用できるわけである。

しかし、なぜ〈断片1〉の冒頭部分でこの手法が採用されているのだろうか。ここで注目すべきことは、〈断片1〉の↓③で示したIの割り込みである。ここの割り込みの直前において4秒の無音区間が見て取れる（〈断片1〉の↑②）。これはTが言いよどんでしまったためにできたものである。ところで、割り込みに関して、江原たちは「性差別のエスノメソドロロジー」という論文において、支持する「割り込み」⁽⁵⁾の存在に言及している〔江原・好井・山崎，1984→1993：204〕すなわち、相手の発言を承認・援助するような「あいでの」ともいえるような「割り込み」が存在しうるのである。このことから、〈断片1〉のIの「割り込み」（↓③）が、Tに対する支持の「割り込み」であるということが言える。また、Iの割り込みの直後にあるTの「はい」は、Iの割り込みがTに対する支持の「割り込み」であったという証拠であると見なせよう。ゲストに対してアナウンサーが支持の意味の「割り込み」をおこなうことは、番組中に意味不明の長時間の無音状態という放送事故が起こることを防ぎ、放送局に対する信頼を維持するためになされることだと思われる。このことから、番組運営者としてのIの存在様態が確認できるだろう。

さらに以下のことを確認することが重要であるとおもわれる。〈断片1〉の↓①でIはTに対して「～ですよね」と真偽の確認を求めていると述べた。このことは、自分は「聞き手」であり、かつ（情報の）「受け手」であることをIが表示しているように思われる。しかし、Tが言いよどんでしまったため（〈断片1〉の↑②）に、Iはある葛藤状態に陥ったと思われる。というのは、Iは「聞き手」性の表示の維持をするためには、たとえTが言いよどんでしまったとしても、むやみに割り込むべきではない。が、しかし、上記で説明したように、番組中の意味不明の長時間の無音状態が長く続くことは、Iや放送局にと

ってあまり好ましくない。そういった葛藤の中で、Iは、上記で述べた支持する「割り込み」を行ったと思われる。このIの支持する「割り込み」は、TがIの質問にうまく答えられるためのヒントになっている。というのも、このままIは「話し手」になりつづけることが可能だったと思われる。しかし、Iは「話し手」になりつづけることをしなかった。語尾を〈断片1〉の↓④で「～ですか」というふうに質問形をとることにより、IはTが「情報提供者」であることを表示し、あくまでも自分が（情報の）「受け手」であることを再びここで表示しているのである。

上記のことから、以下のことが言えるのではないだろうか。Iは、自分の知識を評価する立場としてTを位置づける言い方をすることで、Tこそが話し手で、Iはあくまでも聞き手ということを維持しようとしている。その後、Tはやっと「話し手」としての発言を開始した。Tが「情報提供者」で、Iが（情報の）「受け手」であるという立場が、この〈断片1〉において、TとIの間では維持されたままであるように思われる。その証拠に、ビデオを分析したところ、Iの体の向きはTが話しているときには常にTの方を向いており、その視線もTの方に配られているように見られる。「情報提供者」の方に自分の視線や体を向けることは、「情報提供者」に自分は（情報の）「受け手」であることを表示しているのだといえる。このことも、自分の「聞き手」性をIが表示している証拠となりえるだろう。

この3つの注目点から言えることは、Iが番組運営者であり、（情報の）「受け手」であることを表示していることから、ラジオのワイドショーにおいて一般にあてはめることが可能と考えられるカテゴリー集合である【アナウンサー／ゲスト】というカテゴリー集合において、Iに「アナウンサー」というカテゴリーが与えられ、Tが「情報提供者」であるといったことから、Tには「ゲスト」というカテゴリーが与えられているのではないだろうか、ということである。さらに、Iはラジオ番組の場面ごとの必要に応じて、「話し手」／「聞き手」、「情報提供者」／（情報の）「受け手」という2組4つの概念のうち、（情報の）「受け手」であり「聞き手」（この形態が原則的）、（情報の）「受け手」であり「話し手」という可能な2つの概念の組み合わせの交換を行っているのである。

3. アナウンサーはただの「受け手」か

本当にIはTが提供するボールルームダンスに関する情報を持っていないただの（情報の）「受け手」だろうか。Iはたとえ自らが率先してある語りをする場合であっても、その語尾を疑問形にすることによって、最終的な情報の真偽をTに委ねている。すなわち、Tこそを正当な「情報提供者」として扱っているのである。私たちは次のことに注目したい。それはQシートの存在である。ラジオ番組においては、Qシート（番組進行表）というものが存在する。資料Iを見ていただきたい。

資料 I

0:25	前 T M	C D	<p>(後列し) ★ 徳島ウェブ・リポート ★ (別紙参照)</p> <p>徳島の「Shall We ダンス？」</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 阿南市富岡町出身の [T さん] [E さん] ご夫妻 </div> <p>昨年、ドイツでのモダン選手権大会で決勝にまで進出!</p> <p>お二人はダンスが家で知り合いました 知り合ったきっかけは? お二人がダンスを始めたきっかけは?</p> <p>「ボールルームダンスに魅せられて」 社交ダンスと日本で呼ばれている 「体力の限界まで」・・・かなりハードな練習を毎日続けて</p> <p>映画「Shall We ダンス？」がヒットしたが、ダンス人口は 増えているの?</p> <p>これからのダンスの世界はどうか? これからの予定</p>
◆ P T ①		A F	1' 13"

この資料 I はデータ Z に対応する 1 月 11 日における「サンデーウェブ」の Q シートである。この番組に関する Q シートはディレクターの D によって作成されている。まず、この表において T に関しての簡単な情報が書かれている。それ以外にもさらに詳しい情報が書かれている番組資料が番組参加者に配布されている。番組参加者は、番組開始前及び番組中において、Q シートと配付資料に目を通して目を通しているのが通例である。「ある特定の専門項目について、その答えを知っているか否か」⁽⁶⁾ ということについて、考えてみる。そうすると、アナウンサー/ゲストのそれぞれに関して、知っている/知らないの 4 つの類型がある。それを図示すると次のようになる。

図 1 アナウンサーとゲストの知識状態図 = 4 類型 =

	ゲスト [「情報提供者」]	アナウンサー [(「情報の」)「受け手」]
類型 (1)	知らない	知らない
類型 (2)	知らない	知っている
類型 (3)	知っている	知らない
類型 (4)	知っている	知っている

さて、番組放送時にアナウンサーとゲストの両者の知識状態は、この 4 類型でいって、どの類型になっている場合が多いだろうか。

まず類型 (1) と類型 (2) について考えてみよう。ゲストが知識を所有していることはラジオ番組において前提条件となっている。さらにゲストは「情報提供者」として、そ

の場に存在しているので、自分がラジオ番組において話すことを期待されている情報を、ゲストが知らないということでは番組が成り立たない。よって、類型（１）と類型（２）は気をつけて避けられるはずだ。

一方、類型（３）と類型（４）は、自分がラジオ番組において話すことを期待されている情報をゲストが知っているの、類型（１）と類型（２）に比べれば成立する可能性が高い。しかし、アナウンサーは番組開始前に、Ｑシートや番組資料を持っているということをもふまえると、ゲストがその番組において話す情報をアナウンサーが知らないということはないので、類型（３）が成り立つ可能性は少なくなる。もし仮に、類型（３）の状態での本番があり得たとしても、アナウンサーはゲストが知っていることをゲストに質問したときに、アナウンサーが質問した内容をゲストが知っているかどうかをアナウンサーは確信できないので、アナウンサーはゲストの答えを適切に誘導したり、評価したりできない。また、アナウンサーが質問した内容をゲストが知っているかどうかをアナウンサーは確信できないために、アナウンサーは、類型（１）と類型（３）とを見分けることができない。そうなるとうようなことが起こってしまうかもしれない。というのも、類型（３）の状態において、アナウンサーが「ゲストはおそらくこのことについて知っているだろう」と思って、ゲストにかかわる何らかの質問をしたときに、ゲストはそのことについて知らなかったという可能性が起こり得る。そうなるとうアナウンサーが質問した、ある特定の質問項目についてアナウンサーとゲストの両者とも答えることができない、最悪の事態が起こってしまうのである。これは、番組として、大変危険なことであり、一か八かの賭になってしまうのである。このようなことは、アナウンサーが恐れている放送事故になるかもしれない。だから、アナウンサーとしてやはり類型（３）は避けるべき選択肢となるだろう。そう考えると、一番安全で望まれるのは、類型（４）になるのである。

類型（４）の成立が多く予想される背景には、Ｑシートや番組資料が配布されているということが持つ不思議な効能が働いているように思われる。すなわち、Ｑシートや番組資料が番組関係者に配布されていると、アナウンサーは、番組の構成や話す内容が番組の前にすでにわかっていることになるので、一見、番組がリスナーにとって、新鮮で、魅力的でかつ興味深いものにならないかもしれないと思われる。しかし、実は逆に、Ｑシートや番組資料によって事前に話す内容を知っているからこそ、ゲストの話に山や谷をつけることができ、番組をより魅力的なものとするのが可能なのである。ラジオ番組中に、アナウンサーが「知っているのに知らないふり」⁽⁷⁾を行うことで、適切な場所で驚いたり、リスナーの関心を必要な部分に集中させることができるのである。そうすることによって、リスナーにとって、ゲストの話がより興味深いものとなり得るのである。

では、知識状態の類型（４）の状態で番組作りが行われているとして、具体的にはどのようなテクニックが使われているのだろうか。相互行為分析を試みよう。類型（４）の場合における、「知っているのに知らないふり」をするテクニックについては、実は３つの水準がある⁽⁸⁾⁽⁹⁾。この水準は、番組のライブ感に貢献する程度の高水準であり、言い換えれば、アナウンサーのテクニックの高度さに関する水準である。

水準１テクニック。（以下水準１と略記）知っているのに質問すること。

水準２テクニック。（以下水準２と略記）知っていたはずのことなのに、初めて聞

いたような驚きのマーカの付いた理解表示をすること（例えば「あっそうなんですか」の「あっ」とか「へー」などの発言である）。

水準3テクニック。（以下水準3と略記）その直前のゲストの発言に触発されて、その場であたかも思いついたかのような質問をすること、（例えば「そうすると」とか「としますと」という発言である）である。

次に、水準1、水準2、水準3がどのようにラジオ番組中において使用されているかについて、その事例を以下に挙げていきたい。

まず、水準1の事例。データZの10:25'09"において、IはTに対して、「ダンスと出会ったのはいつなんでしょう」という発言をしている。しかし、事前配布の番組資料に「(ゲストのTは)大学時代舞踏研究部に所属し、競技ダンスを始めました」という記述があり、またQシートには質問文が記述されていることから、あらかじめその答えについてIアナは知っているはずである。番組をおもしろくするために、Iアナは「知っているのに知らないふり」をしながら、ゲストから答えを引き出していることがわかる。

そして、水準2の事例。データZの10:27'23"において、Tの「世界では、ボールルームダンスと呼びます」という発言の後に、Iは「あーそうなんですか」と発言している。しかし、番組資料には「ボールルームダンスが正式名称です」という記述があり、QシートにもここでのTの発言は予告されている。このIの発言の冒頭の「あー」は驚きのマーカで、ここでIは自分の知っていたことを、いかにも初めて聞いたかのように装うことで、リスナーに対して新鮮さを表示しているのである。

次の水準3の場合を考えよう。データZの10:34'27"ごろの場面において、IはEに対して（EはTの奥さん。この場面においてはゲストは2人いることになる）「奥様の方は実はあの一お仕事を引っ張っていらっしやいまして、もともとは、看護学校の先生をなさっていたのが、今は看護婦ですよ」（IQ1=Iの質問の1番目）と発言している。それにたいして、Eは「そうなんです」（EA1=EのIに対する答えの1番目）とIに対して答えている。それを受けて、IはEに対して「看護婦さんというと、夜勤とか時間的に不規則だっというイメージがあるんですが、それとその競技の練習っていうのは相当並行してやっていくの厳しいんじゃないですか」（IQ2）と発言している。IとEの会話は[IQ1（Iの質問1）→EA1（EのIに対する答え1）、IQ2→EA2 …]という流れに沿って成り立っている。ここで注目することは、Iの「看護婦さんというと～」という発言である。このIQ2の発話はあたかもEA1の発話を受けて考えられた質問と見なす事ができる。しかし、番組資料には「(Tの)パートナーのEは高等看護学校から、病棟勤務に転勤、月8回の夜勤、週4回の練習を今でも続けており」とある。そのことから、番組の流れの全体はじつはQシートや番組資料に書かれてあったのだ。IはEに質問する以前に、すでにその返答の内容を知っている。にもかかわらず、Iの質問（IQ2）が、その直前のEの返答（EA1）によって、その場で触発されて生まれた質問であるかのようにみえるのは、その質問が、「そうなんです」というEの発した、直前の回答に言及しているからである。

結局ここまでの議論から以下のことが言えるのではないだろうか。つまり、それは、Q

シートや番組資料が存在し、アナウンサーとゲストの知識状態についての、4つの類型のうちの第(4)類型(ある特定の質問項目に対するその答えについて、アナウンサーもゲストも、ともに知っている)の状態にアナウンサーがおかれていたとしても、アナウンサーは、その場その場で質問を考えたかのような、ライブ感の表示が可能なテクニック(例:「看護婦さんという…」)をラジオ番組中に使用することができることである。上記のテクニックが利用可能であるためには、先の知識状態の類型についての理解が、その場の参加者のかなりの部分に共有されている必要がある。その共有の様子を以下しばらくトランスクリプトを用いて確かめていくことにしよう。

Qシートがアナウンサーやディレクターにとっての共通の情報のリソースとなっていることを証明するために、次の資料IIと〈断片2〉を見ていただきたい。

資料II

10:10			(後クシ) スタジオから、長野オリンピック日本人期待の選手紹介
11:12	◆PT② 前TM	DF▼ 1' 13"	★おどろきのためのこだわり講座★ 紅茶をおいしく飲む紅茶 ③回目 12/7以来 「000000」社長でフード・コーディネーターの [C さん] 今回は、こだわりの水とバラエティー紅茶 水にこだわる・・・硬水と軟水の違い <u>くみ直きの水がベスト</u> 魔法瓶の湯、ミネラルウォーターはダメなの? 水に空気が含まれていないとダメ 「おいしいバラエティー紅茶」 アイスティー・・・濃く出る茶葉が向いている。 ミルクダウン(ミルクを混ぜた様な白い色が出て 味も淡くなる現象)に要注意 ロイヤル・ミルク・ティー・・・正しい作り方は? シャリマ・ティー・・・オレンジを浮かべるおしゃれな紅茶 ウィナー・ティー・・・濃い紅茶の上にホイップクリームを乗せる 紅茶物語・・・今回は、EARL GREY イングリッシュマン・イン・ニューヨーク / STING まとめ そろそろ聖火が蔵本公園に到着するようです。 (前クシ)
	後TM	TR② 1' 06" CD④ 4' 25" DF▼ F.1	

資料IIは、同じく1月11日の番組内での「おとなのためのこだわり講座」というコーナー部分のQシートである。このコーナーのゲストは、この日で3回目の出演である。そして、この〈断片2〉のトランスクリプトは、Qシートと対応させると、資料IIの下線部に関する話題の部分を話しているところのトランスクリプトを抜き出したものである。Qシートには「くみおきの水がベスト」と書いてあり、Iは、Qシートに書いてあるとおりに「くみおきの水がベスト」ということに関する情報をゲストで紅茶の専門家のCから引き出すために、Cに話を持っていった。ところが、Cによれば、くみおきの水ではなくて、空気をたくさん含んだくみたての水の方が、おいしく紅茶をいれることができるということで、CはQシートとは正反対のことを述べてしまった。そういったことから、GとIは、「間違っているぞ」というようなことをQシートの作成者であるDに示そうとして、GがIに若干遅れながらも協調して、Dの方を見ていることがトランスクリプトでも確認できると思う。さらにGに関してはそのあとDに指を指しながら、Dをからかいながらも非難しているかのようなのである(↓①)。このDの非難の理由は何だろうか。おそらくは以下のような説明ができるであろう。Cの回答を番組としてより魅力的かつ新鮮に見せようとして、Iは声の大小やテンポを変化させながら、Cに問いかけをした(トランスクリプト下線部参照)。しかし、この前項での水準1のテクニックの使用が肩すかしをされてしまった原因の由来であるDに対し、Iと同じ事前情報を持っていたアナウンサーのGはIと一体になって「非難」をしているのである。このGの振る舞いからも、IとGが、Qシートを情報のリソースとして共有していたことがわかるだろう。逆に言えば、ラジオスタジオ空間にいる参加者たちにQシートが共有されていたからこそ、Qシートの間違いが水準1テクニックの使用を通じてよりはっきりと目立ってしまったとも言うこともできるが、いずれにせよ、番組の構成には相互行為的に大変複雑な構造が関与しているのである。

4. 志向対象としての「リスナー」

だがここで、ある疑問に突き当たる。Iは「情報提供者」が番組中に話す情報を、すでにQシートや前もって渡されている番組資料から知っているにもかかわらず、なぜラジオ番組のなかでは、(情報の)「受け手」ということを表示し続けているのか。結論を先取りして言うならば、それは番組の間中、リスナーがラジオ番組において、終始志向の対象となっているからである。そのありようを具体的な相互行為の中で見てみよう。このことを分析するために、私たちは次のトランスクリプトを作成した。この場面も〈断片1〉と同じようにIとTとのやりとりである。そして、ここの場面での会話の話題は、ボールルームダンスが最近注目されていること。そして映画やテレビ番組において、それがとりあげられていることが、ボールルームダンスが流行しているきっかけとなっていることについてである。

〈断片3〉 データZ (10:29'07" ~ 10:29'22")

I : ま、話題づくりにはね// (.) になってます (分析不能) あの：ウッチャンナンチャ

G :

T : //はい

↓①

I : ンなんかの//ね

hhえ :: :: :でも我々素人が

G : =あhはhはhはhはh

T : //そうですね=

↓②

I : 見てるとよく頑張ってるように見えるんですが :: =hhプロの目から見ると :: ::

G :

T : =はい

I : やっぱりちょっとまだ技術的に (1. 0) =っていう=

G :

T : ま、ちょっと= =そうですはい

この〈断片3〉において注目すべきことは、Iが「我々素人が見てると～」と発言していることである(↓①)。「我々」という言葉が複数形を指す言葉であり、さらに、Iが「我々素人が～」と発言していることから、この言葉はI以外の他者も指示していることになる。はたしてこの「我々」とはどの範囲の人間のことを指しているのだろうか。

まず最初に確実なことから考えることにしよう。〈断片3〉においてIが「プロの目から見ると～」といっている(〈断片3〉の↓②)。しかし、ゲストの夫婦は「プロ」ではなく「アマチュア」であるので、この場面を構成している成員の中に「プロ」は存在していないはずである⁽¹⁰⁾。にもかかわらず、その場面において、IがゲストのTを「プロ」として扱うことは有意味に思われる。というのは、〈断片3〉で使われている「素人」=「アマチュア」というカテゴリーは、習熟している人の一般人口比が他のスポーツと比べてかなり小さいボールルームダンスというスポーツのいわゆる「プロ」と対比された、ボールルームダンスの「アマチュア」であって、すなわちボールルームダンスについてほとんど情報を持っていないという意味での「アマチュア」だからだ。このような解釈ならば、Tを先に「アマチュア」と呼んでおきながら(図2参照)、ここで「プロ」と呼ぶことが可能になる。なぜこのようなことが起きているのだろうか。以下簡単ななぞ解きを行ってこよう。

先に「T」の属性とされた「アマチュア」という言葉は〈断片3〉では「T」の属性とすることは不適となっている。というのも、もし、IとTとの関係において、Tに「アマチュア」というカテゴリーを与えてしまうと、Iに与えるカテゴリーがなくなってしまう(ここでいう「アマチュア」は図2のプロ①に相当する)。そうすると、2節で述べた「情報提供者」と(情報の)「受け手」というカテゴリー対の構図を維持しがたくなっている。

その危険を避けるために、ここでは「アマチュア」という言葉を使うのをIは避けたのではないだろうか。そう考えると、この場面において、たとえTがダンスを専門にしていないう意味で「アマチュア」だったにもかかわらず、Tに「プロ」というカテゴリーがIによって与えられている理由が分かる。つまり、「(ボウルルームダンスについての情報を持っているという意味での) プロ」と「(情報を持っていないという意味での) 素人」というカテゴリー対がこの場面において有意味になっているのだ(このカテゴリー対は〈プロ/アマチュア〉規準IIの構図のことを指している。また、この規準におけるアマチュア②は「素人」と置き換え可能であるように思われる)。この〈プロ/アマチュア〉規準IIにおける「プロ②/アマチュア②」というカテゴリー対は「情報提供者」と(情報の)「受け手」というカテゴリー対とほぼ同じ構図であろう。

図2 「プロ」と「アマチュア」に関する2種類のカテゴリー対

〈プロ/アマチュア〉規準I～そのことに関して専門か否か

- ・プロ① …そのことを仕事していて、そのことに関して専門である人
- ・アマチュア①…そのことに関して専門でなく、別な仕事をもっているが、そのことを(趣味などの範囲において)ある程度のことは行っている人

〈プロ/アマチュア〉規準II～そのことに関して習熟しているかどうか

- ・プロ② …そのことに関して詳しい知識を持っている人
- ・アマチュア②…そのことに関して知識を持っていない人

ところで、そうなるとこの会話における「我々」とはT以外の誰かに割り振られていることになる。その場面において、「我々」という言葉に割り振られているものが何であるかについての可能性として、次のことが考えられる。ラジオスタジオにおいて会話に参加しているのはIとGとKとTとEである⁽¹¹⁾。よって、先程も述べたように、TとEに「プロ」というカテゴリーが与えられたことから、「我々」というカテゴリーが与えられているのがIとGとKではないかという可能性が含まれていることは間違いない。

たしかに、「我々」を構成しているのはIとKとGといった(情報の)「受け手」であるかもしれない。しかしそれだけではないように思われる。つまり、次の可能性は、「我々」という言葉の対象がリスナーを含んでいるという可能性である。「我々」という言葉の指し示す内容にリスナーが含まれている理由を次に示してみよう。

上記において、「我々」の指し示す内容が、IとKとGであることは、「プロ」と「素人」のカテゴリー対において、「プロ」というカテゴリーがTに割り振られていることから理解できたと思われる。しかし、IとGとKは、単なる「聞き手」ではなく、先に見たように(情報の)「受け手」でもあるのだ。アナウンサーはなぜ「情報提供者」と(情報の)「受け手」というカテゴリー対を維持しようとしているか。それは、番組を盛り上げるために、アナウンサーが3節で述べたような3つのテクニックを用いたり、アナウンサーやゲストに関する知識類型図において類型(4)を選択していること自体が背後にリスナーというものをかかえているのである。このことに関して、山田富秋はニュースインタビューについての「会話分析の方法」という論文においてこのように述べている。[山田, 1995:128]

つまり、〔インタビュアーは〕インタビューをするのは自分の私的な目的のためではなく、「聴衆」に向けられた「公的な」行動として行っているのだということを示す必要がある。〔 〕は筆者挿入

これは、ニュースインタビューだけでなく、放送一般にも当てはまることではないだろうか。つまり、ラジオスタジオ空間においても、その場には存在していないが、つねに「リスナー」というものが意識されているはずである。なぜならば、「情報提供者」と（情報の）「受け手」というカテゴリー対の構図自体が「リスナー」を志向しているために起こっているからである。アナウンサーは「リスナー」の代表者として「情報提供者」から情報を引き出しているのであり、また、「リスナー」と「情報提供者」とを媒介する存在である。ただ、その二者を媒介するにあたって、「情報提供者」に関する情報を知らなければ番組をスムーズに進行させることに失敗する可能性がある（このことについては第3節において言及した）。アナウンサーは「情報提供者」が知っている範囲での情報を Q シートや番組資料から得ており、その情報について、ラジオ番組のなかでゲストと会話をしているのである。

5. まとめ

どのようにしたら、アナウンサーがラジオスタジオの場面においてアナウンサーとなっているのかを、カテゴリー対という概念を使って考えてきた。アナウンサーはゲストとの関係において、基本的には「情報提供者」と（情報の）「受け手」というカテゴリー対関係を維持しているということ、場面場面において、そして様々なテクニックを使用しながら表示している。そこでは、見ることができる相手としての「ゲスト」と見えない相手である「リスナー」との媒介者としてのアナウンサーが存在している。

だが、この番組がワイド番組であるということも多少関係しているように思われる。というのもワイド番組というものが、ラジオ番組、ニュースインタビューという枠組みにおいて、日常会話が行っているものと見なすことができるからだ。

注

- (1) これらの研究とは、人種や言語が違うことを独立変数的に、つまり自明なものとして扱ってしまい、何らかの発見に対してそのことを説明の根拠として、みなしている研究である。
- (2) 山崎らの論文では、カテゴリー化がいささか恣意的であると思われ、身体障害者ということが前提とされていたきらいがある。山崎らの分析と岡田の分析の両方が、山崎らが集めたデータを用いて分析しているにもかかわらず、異なる結果が生じていることが私たちの注目している点である。このことで、私たちはこの分析において厳密な議論をしなければならないと感じた。
- (3) このデータで使用されている記号に関する詳細は、第 I 部の記号一覧表、配置図を参照せよ。

- (4) このトランスクリプトにおける「ボールルームダンス」とは、日本における社交ダンスのことである。
- (5) 「性差別のエスノメソドロロジー」の論文においては、支持する「割り込み」のことを「支持作業」という表現で使っている。
- (6) ここではエスノメソドロロジー研究の通例に反して、神の目から見て初めてわかるような客観的状态として、知識状態を記述している。本来ならば、両者の相手側への期待の視点からより複雑な図を書かねばならないのだが、ここでは議論の簡便化のためこのような簡略図を採用した。
- (7) 放送がしばしば“やらせ”批判を受けてしまうのは、放送にこのような構造要件があるからである。
- (8) この水準1、2、3に関する議論においては、樫田の助言が有効であった。とりわけ水準3の事例は樫田の示唆によるものである。
- (9) これはラジオ放送の分析だけでなく、放送一般において言えることである。テレビで分析してみると、容易に見つけることができる。
- (10) Iは、番組内でゲストTとEの成績を紹介するにあたり、「全国にアマチュア競技選手がおよそ3000組いらっしゃるんだそうですが、今年度のランキングが7位」と言っている。(データZ 10:26'29")このことから、ゲストTとEがアマチュアであることが明らかだと言えよう。
- (11) トランスクリプトから省略されているが、他の場面において、GとKが会話に参加していることが確認されている。

参考文献

- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一, 1984, 「性差別のエスノメソドロロジー——対面的コミュニケーション状況における権力装置」, 『現代社会学』18, アカデミア出版会:143-175
→, 1993, れいのるず・秋葉かつえ 編, 『おんなと日本語』, 有信堂:190-228.
- 小林康雄・船曳建夫, 1994, 『知の技法』, 東京大学出版会.
- 森田聡之, 1997, 「気にすること・無視することの分析可能性」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社:99-122.
- 西阪 仰, 1992, 「参与フレームの身体的組織化」, 『社会学評論』, 第43巻, 第1号:58-73.
——, 1993, 「異文化性の社会的構成 ——たとえば日本人はどうやって日本人となっていくのか——」, 『社会学・社会福祉研究』, 第514号:223-249
——, 「会話分析に何が出来るか ——「社会秩序の問題」をめぐる——」, 奥村 隆 編, 『社会学に何が出来るか』, 八千代出版:115-154.
——, 1997, 「語る身体・見る身体」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社:3-29.
- 岡田光弘, 1995, 「相互行為場面における身体とカテゴリー ——身体社会学としての購買場面のエスノメソドロジ的相互行為分析——」, 『Sociology Today』, 第6号:27-38.
——, 1996, 「『制度』を研究するということ ——インタビューと119番通話の終了部の会話分析——」, 『現代社会学理論研究』, 第6号:165-180.

- Sack,Harveys, 1972, "An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology", David Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*, The Free Press:31-73, note:430-431.=1995 北澤裕・西阪仰 訳「会話データの利用法——会話分析事始め」, 『日常性の解剖学——知と会話』, マルジュ社:93-137.
- Schegloff,E,A.and H.Sacks, 1972, "Opening up closing" *Semiotica* 7: 289-327 = 1995 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」『日常性の解剖学』マルジュ社 :174-241.
- 山田富秋, 1995, 「会話分析の方法」, 『他者・関係・コミュニケーション』, 岩波書店:121-136.
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正, 1993, 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力——〈車いす使用者〉のエスノメソドロジ的研究——」, 『社会学評論』, 第44巻, 第1号:30-45.